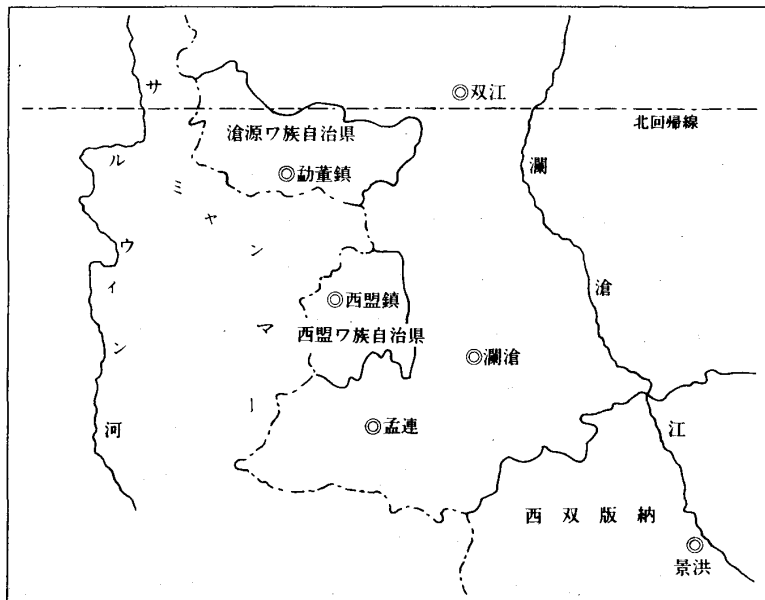


雲南省少数民族村寨点描 (二)

古島 琴子

目 次

- 一 ワ(佤)族の村へ
 - 目的 行程
- 二 ワ族とは
 - 言語系統 人口と分布 歴史
- 三 ワ族の村寨と生活
 - 滄源ワ族の村寨 西盟ワ族の村寨
 - 四人の頭人 生活文化の特徴
- 四 〈砍頭祭穀〉と〈木鼓〉
- 五 タイ族、ラフ族との関係
- 六 アワ山の半世紀



一 ワ族の村へ

今春、ルソン島北部のポントック族と類似する文化を持つワ族の村に行きたいという柳宗玄先生(美術史)を案内して、雲南省臨滄地区の滄源ワ族自治州県、思茅地区の西盟ワ族自治州県に行った。

93年3月11日、一行4人はランドクルーザー2台に分乗して昆明を出発、南下して玉溪市、峨山イ(彝)族自治州県、元江ハニ(哈尼)族イ族タイ(傣)族自治州県を経て哀牢山脈中の墨江ハニ族自治州県県城に宿泊、翌日は墨江、把辺江を渡り、无量山脈中の普洱ハニ族イ族自治州県へ、ここから西北に向かい威遠江畔の景谷タイ族イ族自治州県県城に宿泊、三日目は瀾滄江を渡り、双江ラフ(拉祜)族ワ族プーラン(布朗)族タイ族自治州県を通過、小黑江橋のゲートで許可証のチェックを受け、滄源県に入った。山はますます深まり、銃を肩に長刀を腰に下げて歩いているワ族の人々に出会う。夕刻県城の勐董鎮に到着した。

昆明から滄源県までは滇緬公路を通り大理経由で来る方が道がよいというが、今回のルートは道は悪くても照葉樹の原生林や溪流の美を堪能し、多様な民族の暮らしを垣間見ることができてよかった。三月の雲南の山々は山桜のように玉荷花のピンクに彩られ、道端には攀枝花(パンヤの木)の大木が真紅な大輪の花を咲かせている。

伝統的生活習慣を保有するワ族の住むアワ(阿佤)山区は、西盟県の大部分と滄源県、孟連県に及ぶ。3月14、15日は滄源ワ族の二つの村寨を訪ね、古代人の描いた崖画二ヶ所を見た。16日は西盟県へ1日かかりで移動し、17、18、19日は西盟ワ族の村寨を訪ね、20日西双版纳タイ族自治州の勐海県へ、21日は勐混の日曜のバザールとタイ族の村を一つ訪ねて景洪に出た。走行距離は2千数百キロ、翌日空路昆明に戻った。

今回は案内役として雲南の最も奥深い地方を見て来ようという程度の考えで出発したが、実際にワ族の村々を訪ねると、その環境や生活の様子、

タイ族やラフ族との関係など非常に多くのことがわかった。詳細な記録ではないが、文献を見なおして確かめ、一昨年の「雲南省少数民族村寨点描」（『中国研究月報』525号）に続く同（二）としてまとめた。

二 ワ族とは

ワ族は、言語系統では南アジア語系モン＝クメール語族ワ・ドアン語支に属し、ドアン族、プーラン族とともに中国の少数民族のなかでも少数のモン＝クメール系民族で、中国の史書にある古代の「百濮」の流れを汲む。容貌は茶色の皮膚と大きい目を特徴としている。

中国のワ族人口は35万1974人（90年）、地続きのミャンマー（ビルマ）側には30数万のワ族が居住し、タイ北部のラワ族1万1536人（80年）、ラオスのカワ族（人口不明）も同一民族である。東は瀾滄江—メコン河、西は怒江—サルウィン河、北は徳宏州と保山地区、南はケントン、チェンマイにおよぶ広い地域に居住し、その中心に中国とミャンマー両国にまたがるアワ山区がある。中国のワ族はこのアワ山区とその周辺、雲南省滄源、西盟、耿馬、孟連、双江、瀾滄、鎮康等の各県に居住する。

ワ族は社会発展の速度が緩やかで、西盟ワ族は伝統的生活習慣を保持し、50年代まで首狩りの風習を行っていたことで知られている。その社会は原始村落共同体の解体期あるいは奴隷制の初期段階といわれ⁽¹⁾、古代から人里離れたアワ山区で原始的生活を送ってきたかのような印象を受けるが、現在アワ山区に住むワ族はここにずっと住み続けていたわけではない。ワ族の人類起源説の〈スカンリ（司崗里）〉伝説は、人間はスカンリという洞穴から生まれたという。その洞穴は今回行った西盟県大馬散寨の西25キロ、ミャンマー領内のパゴータイにあったとされ、パゴータイはワ族の聖地としてその祭祀には雲南のワ族も参加す

るが、この伝説によれば、ワ族発祥の地はアワ山区であり、ここから瀾滄江—メコン河と怒江—サルウィン河の間の各地に広まったというのである。

タイ系民族が南下する以前のシャン高原からタイ北部にはモン＝クメール系民族が居住し、ワ族もその一つであった。〈ランブーン年代記〉には、9世紀なかばタイ北部のチェンマイ、ナン—帯にはラワ族の王国があり、ランブーン（ハリブンジャヤ国）と戦って敗れ、深山密林に逃げこんだという記述があり、ワ族が王国を形成するほどの勢力を持っていたことがわかる。

タイ系民族の南下にしたがい、ワ族は北方の山奥に逃げこむのであるが、現在シャン高原のケントンに住むワ族には「ワクト（遺棄された民）」という自称があり、かつてこの地に住んだワ族の大部分は他民族との争いに敗れて山奥へと逃れ、我々は遺棄された民なのだというのである⁽²⁾。ベルナツィークの調査にも、1930年代なかばケントンのシャン族の祭りには、彼らが先住のワ族から土地を強奪したことを証明する芝居が行なわれていたということがあり⁽³⁾、今回訪ねた滄源県羊冷寨付近のワ族には、祖先はミャンマーのケントンに住んでいたがタイ族に攻められて移住、各地を移動した後約二百年前から滄源県に住むようになったという伝承がある。南方のワ族は以上のようにタイ系民族の進出に圧されてケントンから孟連、瀾滄、滄源、西盟へ、北方のワ族もタイ族やイ族系民族の圧力を受けて耿馬、滄源、双江、瀾滄へとアワ山区とその周辺地区に移動し、現在のワ族居住地域が形成された⁽⁴⁾。

ワ族は頻繁に移動をくりかえした。たとえば大馬散寨を建寨した家系は10数個の地方を移住した後大馬散に定住している⁽⁵⁾。このような移動の繰返しは他民族の圧力から逃れるためであったと同時に狩猟採集と焼畑耕作を維持する必要から生じたことでもある⁽⁶⁾が、アワ山区へ移動したワ族は伝統的生活習慣を保持し、カワ族と呼ばれ

て恐れられ、シャン高原に残されたワ族は他民族に馴化してラフ族と呼ばれるようになった。

伝説の<スカンリ>がアワ山区にあったとするならば、ワ族にとってアワ山区は発祥の地であると同時に避難し回帰してきた土地である。

アワ山区の朝は、中腹に見事な雲海をまといどこまでも続く山々の峰、神々しいと表現したい美しさである。そこに住むワ族の生活は、いまでも近代とは程遠く古代に近い生活であるが、それを未開とか遅れているとか言うことはできない。はるかな昔、私たちの祖先もこのように暮らしていたのであろうという感慨を抱くとともに、最近まで日本にもあった生活様式、似通った感性や意識を発見したのである。

三 ワ族の村寨と生活

1 滄源ワ族の村寨

滄源ワ族よりも西盟ワ族の方が伝統的生活を保持していると紹介されているが、今回訪ねてみると滄源ワ族の村の方がむしろ伝統的村寨の形をよく整えていた。

滄源ワ族自治州は北回帰線の南側にあり、南から西はミャンマーとの国境、県城の勐董鎮の宿舎から見える山の尾根は国境線であるという。標高は最高2600メートル最低450メートル、山々が起伏し、平地は勐董鎮の小さい盆地だけである。人口8万3千、ワ族は7万余人で総人口の85%、残りは漢族、タイ族、ラフ族等である。勐董鎮はタイ族の土司がいた所でタイ族が水田を作り、ワ族の集落は山の奥深い所に点在する。

滄源県では勐董鎮の西北にある勐角民族郷蠟汀寨、勐董鎮東部の羊冷弁事所羊冷寨を訪ね、崖画を見に行く途中丁来と勐来の集落にも立ち寄った。

かつてワ族の間では首狩りの風習を原因とする村寨間の争いが頻繁にあったため、敵の攻撃に備えて村寨の周囲に壕を掘り、イバラやとげのある木で囲み、出入り口は序列の高い村に向かって開く寨門、死者を送り出す幽門、畑に出る門等最小限にして厳重に警戒していた。

最初に訪ねた蠟汀寨は、約百年前首狩りの風習をやめたおだやかな村寨である。防禦のための寨門や壕、垣根はなかったが、集落の形はよく整い、



▲ 滄源県蠟汀寨

草ぶき屋根の高床式住居がずらりと並ぶ大集落、日本の弥生時代の集落を彷彿とさせる光景であった。

寨の戸数80世帯、人口約500人、大部分はこの集落に住んでいるようだ。耕地は水田1400ムー、茶畑とサトウキビの畑660ムー、牛の飼育が盛んである。

集落の中心に広場があり、土地神を祭る男女のシンボルを彫刻した木柱が立ち、その横に鳥、船、魚の飾りを下げた高い柱が立っている。人々を船に乗せて彼岸に導く仏教思想を表現した柱で、タイ族の影響によるものという。

この広場に向かって入り口を設けるという家屋は、草ぶきの入母屋式屋根、高床で、基本的にはタイ族、ハニ族の高床式住居と同じである。同じモン＝クメール系のドアン族の住居がロングハウスであることから考えると、これはタイ族の影響かもしれない。しかし、タイ族の家に比較して床下の柱は短く、床上は屋根の傾斜が床面まで流れて側壁がなく、テラスにつながる部分の屋根を切り取って出入りする。外見は草ぶき屋根が地面近くまで蔽いかぶさって見える⁽⁷⁾。

頭人だった人の家を訪ねる。頭人の家は一般村民の家より高く、棟木の端に千木と飾りがつく。家の内部は奥の方が少し仕切られているがほとんど一間、窓がなく、床は板敷き。部屋の中央の囲炉裏では太い木の枝が燃えている。正面は主人の座、床柱を背にして元頭人のヤンローターさんが籐椅子にかけている。その奥は寝室兼居間、みだりに立ち入ってはいけない場所である。その右手前に家の神、祖先の霊を祭る場所「ク」がある。といっても屋根裏にあたり、草の結び目に御幣のような白紙を切った物が差してある。

ワ族の家には三つの囲炉裏があるという。中央の囲炉裏では食物を煮炊きする。囲炉裏のごとく（さんとく）は特定の人以外はさわってはいけない。引っ越しの時は引っくり返して行く。もうこ

こには絶対に住まないという意味であり、改築の場合は老人が持ち出して保管し、完成したらもとに戻す。入り口近くの囲炉裏では家畜のえさを煮る。もう一つ鬼神に供える食物を煮る囲炉裏があるというが、どの家にも見当たらなかった。

囲炉裏のそばで話を聞いていると、絶えず牛の首につけた鈴の音が響いてくる。牛の飼育が盛んで、頭人の家でも水牛3頭、黄牛6頭を飼っている。ワ族が狩猟採集経済にあった頃、雲南の山野に生息する野牛を捕えて暮らしていた。野牛が畜牛となっても牛とワ族の関係は深い。

盤汀寨にはいまでも幽門があり、西に向かって開いている。門の上部を箆目に編んだ竹で巻いているのはターレオの一種かあるいは注連縄の類なのか？横に小さいターレオが刺してあったが…。

門を出るとすぐ前に死体を埋葬する竹林がある。死者は木棺に入れて地中深く埋め、土を平らにして土饅頭は作らず墓標も立てない。首狩りの風習により掘り返されて頭を奪われることを恐れ、埋葬場所をわからなくしたためである。頭人の魂は死後「ニィム」と呼ぶ場所に行くと考えられている。

ワ語でニィェは部屋、ムは神である。「神の部屋」はワ族本来の宗教の祭祀の場で、村の外の少し高い場所にあるというので幽門から再び集落に入って通り抜ける。方角は集落の南側になろうか、神木として大事にしている大青樹の大木の下にニィムの建物があった。神殿というべきかもしれないが小屋である。二つの小屋うち本殿の方は、外側に柱のように沿わせて二本の木が植えてある。これは神の依代であらうか。その前に白紙をつけた御幣が三本立てられ、食物を供えた跡がある。ワ族が神霊に通じる楽器と神聖視した＜木鼓＞はここに置かれていたがいまはない。木鼓を意味するものなのか二本の棒が置いてある。

大窩朗の司祭により村の安全、繁栄を祈る祭祀がここで行われる。草ぶき屋根に囲炉裏の住まい

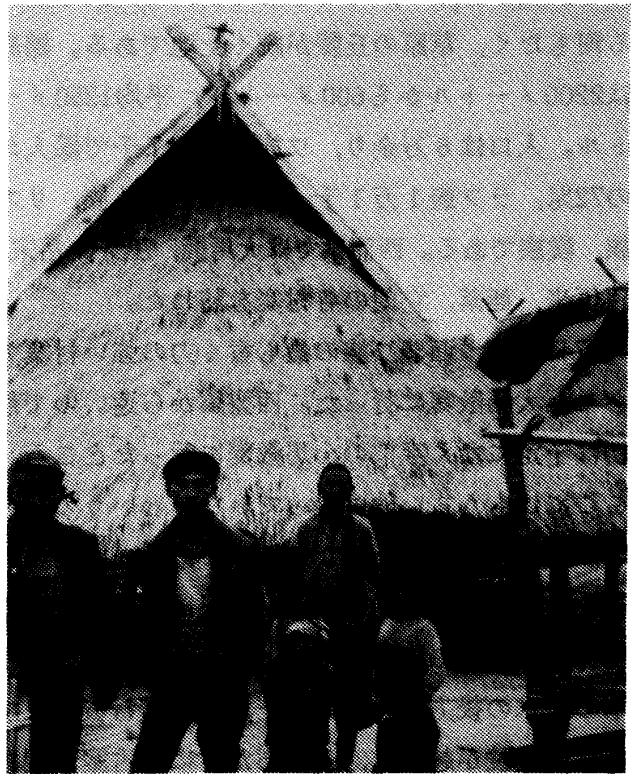
は火災が発生しやすく、集落が全焼することもあった。旱魃も少なくなく、火避けの祈り、雨乞いの祈りなど村中の男性が集まって村の神、祖先の霊に加護を祈る。ここには女性は参加させず、妊娠中の妻を持つ男性も参加させない。

媪汀寨は、木がよく繁った山に囲まれ、ニエムの上には泉が湧いているのだろうか、孟宗竹よりも太い竹で笕を作り、寨内の水場まで引き入れている。太い竹の先から常時溢れ出る水、野菜を洗い、洗濯する娘たち、長い竹筒に水を汲んで帰る女の子で水場は賑わう。山住みの少数民族はみな豊かな湧き水を沸かさずに飲む習慣があるが、ワ族も生水を飲み、最近までお湯やお茶は飲まなかった。

次に訪ねた羊冷寨は、戸数80戸、人口367人、耕地は水田、畑と合わせて460ムー、媪汀寨に比べると耕地は随分少ない。こういう数字は正確度は期待できないが目安にはなる。作物は同じように水稻、陸稻、茶、サトウキビである。

羊冷寨の家は立派な家が多い。昨年改築したばかりの元頭人の家の屋根にはつばめと男性像の木彫りのついた立派な千木がついている。つばめはワ族の崇拜する鳥、男性像は祖先神を意味している。屋内の大黒柱と梁には男性の裸体像と女性の生殖器の彫刻があった。これは村のシンボルであるという。媪汀寨の広場にあった土地神を祭る柱と同類の物であろうか、この寨では頭人の家のなかにある。滄源県民族事務委員会の黄蕾さんの説明によれば、ワ族は自然＝太陽、星、月と生殖、祖先を尊重した。現在大黒柱の彫刻が男性像であるのは母系制社会から父権制社会への移行を示すものだという。

85歳になる元頭人ダー ブロッカーさんは、「この村は紹興部落に従属していた。ワ族が公明山（滄源県の南側ミャンマー領内）から戻ってきた頃マンジュオンという頭人がいて、妻が4人いた。第一の妻の子が紹興王となってチャオタイ＝



▲ 滄源県羊冷寨
元頭人(後方)とその家

土地の主人と呼ばれ、このあたりのワ族はみな紹興部落に貢納してきた」といい、ワ族の移動と村寨間の関係を説明する話をしてくれた。

この村も約百年前から首狩りの風習は止めたが、現在の中国になる少し前、強い村に2人の村人が首を切られたことがあり、「いつ山の向こうから大カワが襲ってくるかとビクビクしていた。その頃は牛を盗まれることも多く、牛飼いはいつも警戒して見張りをしなければならなかった」とダー ブロッカーさんは語る。

この村でも絶えず牛の首の鈴の音が響き、おだやかな山里の雰囲気であった。

2 西盟ワ族の村寨

西盟ワ族の村寨は、足元に雲海を見ながら曲がりくねった山道を登り、眺望の開けた尾根近くにあった。滄源県の二つの村寨と異なり散在する家々、なんとなく荒れ果てた感じが強いが、人々はたくましく、活力があるように感じられた。

西盟ワ族自治州は滄源県の南にあり、ミャンマー

との国境が89キロ、そのうち19キロは両国を隔てる河もなく、草原の丘陵が続く土地である。標高は2200メートルから600メートル、平均1350メートル。人口は6万余り、ワ族は4万7千で総人口の72%、ラフ族1万1千、そのほかタイ族、リス族、漢族である。西盟県では大馬散、王牙、岳宋、阿佻来、亜落、它朗の各村寨を訪ねた。

17日午前、西盟ワ族の最も古く力の強い村寨であった大馬散寨に行った。西盟鎮から遠いので最初は予定になく手前の小馬散寨に行ったところ、ここにはもう古い物は残っていないというので大馬散寨まで行くことになったのである。悪路の山道を4WD車の威力で登る。尾根に出るとやがて前方に大馬散の集落が見え、集落の背後に立つ一本の大木の後方はミャンマー、遠く霞む彼方まで草原の丘陵が起伏し、そのあたりに木古寨、錫古寨などワ族の村寨があるはずである。「あそこにも集落があったがミャンマーに行ってしまった」と指差された眼下の土地、あたり一面に生い茂る解放草。「解放後この草がはびこってしまって」とワ族の人は渋い顔で言う。牛も食べない解放草は草丈1メートルほどの多年生植物、白い花をいっぱい咲かせ、猛烈な繁殖力で雲南の山野を蔽いつ

くす勢いである。

アワ山区で最も威力を誇っていた大馬散寨は、標高約1600メートルの丘陵地帯にある。50年代の調査によれば、山の傾斜に沿って上から下まで100メートル、扇形に200戸余りの家があり、村寨の周囲をとげのある植物をからませた柵で囲い、外側に壕を掘り、寨門の外側2,30メートルは嚴重防備の通路を作っていたという⁽⁸⁾。

いま大馬散寨には壕も垣根もなく、荒れ果てて人影も少ない。柳先生の希望される民具も竹のコップが2,3点だけ。「古い物はみんな民族委員会の人が持って行ってしまった」と年配の女性が言う。森林もごく僅かで、残るのはただすばらしい眺望だけ。栄光の大馬散寨はどうなったのだろうかと思ひながら山道を下る。

この日の午後訪ねたのは西盟鎮東南の王牙寨、この村も尾根筋にあるが、中央に現在の中国らしい建物や広場があり、草ぶき屋根の家のほかには古いワ族の村寨の特徴はない。村の会議室でまず水酒のコップが差し出され、飲みはすまで繰り返すすめられる。若い村長が「昔だったら皆さんは首を切られてここまで来ることはできなかったでしょう。」と笑う。もう首を供えた木鼓房はなく、首を置いた人頭桩のあった所へと案内された。村はずれの畑を横切り、そのはずれの急傾斜の底にあったのだというが、覗きこんでも何もない。近く土地にも以前は集落があったという。文革期に強制合併させられた跡なのだろうか。

広場では民族衣装を着て見せてくれた。男性も二人、頭にターバン、太いズボン、腰に長刀を下げ、パイプをくわえている。女性のスカートを買うと、新しいのも汚れた古い物もみな50元である。

18日午前西盟鎮の西16キロの岳宋寨へ行く。北は大馬散寨、西側はミャンマー、西盟からミャンマーに行く交通の要衝にある。岳宋寨は約200年の歴史を持つ大寨で、12集落、550世帯、人口200人、耕地は1万ムー、作物は陸稲、水稻、ソ



▲ 西盟県大馬散寨

銃と刀を持った男性が行く。白い花は解放草。

バ、赤米、豆、茶を栽培し、出稼ぎも収入源である。ここでは家の新築中、骨組みの柱が建ったところに行きあわせた。家を建てる時は鶏骨占いによる吉日に着工し、5,6日で完成する。耐用年数は木造の家は約20年、竹棲は3,4年であるという。村の人30人余りが手伝い、少し離れたところで女性が大鍋を二つ火にかけ昼食の準備中。家を建てる時は互いに手伝うので労賃は支払わないが、食事は出す習慣である⁽⁹⁾。

午後は阿佤来寨へ。この日県から同行したワ族の女性幹部は、父親がこの寨の出身で西盟鎮に出て県の仕事についている。

阿佤来寨は147世帯、人口637人。この村は5世代前、1世代25年と計算して約120年前ミャンマーから移住してきた。当時ワ族とタイ族は半々で雑居していたが、いまはみなワ族である。タイ族はさらに移住したのかワ族化したのか、その両方であるかもしれない。

家屋や集落の雰囲気は他のワ族村寨と変わりはないが、いまも健在な頭人の家を訪ねるとタイ族の血、タイ族文化の影響が濃厚である。アワ山区ではタイ族もワ族となった方が生存に適したのであろうが、文化的要素は融合し継承されている。

この寨の郷名は僥僥（リス）郷である。リス族はラフ族と一緒にアワ山区にきた。人口は少数だがこのあたりに住んでいる。

19日午前、勐梭郷戈約寨亜落村へ。40世帯、人口280人の小さい村である。ここよりさらに山奥の亜落寨が本村であるが、人口が増え、耕地が不足したため58年から61年にかけて移住してきた。ここにはもと一つのワ族の村があった。大馬散寨とワンモー寨との中間にあり、大馬散寨に従属していたが、大馬散寨のワンモー寨襲撃計画をワンモー寨に知らせたため大馬散寨によってみな殺しにされた。46年か47年頃のことである。無人の地となっていた跡地に亜落寨から10人で移住し、生き残った人々と一緒に戈約寨を作った。ここで会っ

た元頭人は移住当時のリーダーである。

勐梭郷の中心は西盟県唯一の小さい盆地でタイ族の水田がある。山から下りて瓦屋根の高床式住居のタイ族の集落を見ると、文明世界に戻ってきた感じがする。ワ族の村は盆地の周囲の山の中にあるが、タイ族の影響を受けて屋根がセメント瓦に変わり始め、傾斜もゆるやかになり階上部分に側壁がついている。亜落村の元頭人の家の室内装飾はワ族風にタイ族風が混在していた。

午後は勐梭郷の古いワ族の村它朗寨に行く。323世帯、人口1400人のこの村は県の外事弁公室主任李岩さんの出身の村である。集落の中央に小学校がある。4教室の校舎一つと広い校庭、先生は李岩さんの妹、民族衣装の生徒たちと一緒に迎えてくれた。

82年、この村は火災に遭い、ほとんど全焼した。その後建てた家の草ぶき屋根に千木は全く見あたらない。村はずれに木鼓房と人頭桩の跡地があるというので行ってみたが、いまはただの藪であった。その先の畑の向こうに小高い場所があり、大青樹のような大木の樹林が見える。そこは它朗寨ばかりでなく他のワ族寨にとっても鬼神の地で、ふだんは恐れて誰も近寄らず、年一回鬼払いの祭祀を行なう。

寨のすぐ裏手の山にも鬼払いの場所があり、周辺の村の人もしやって来て、毎日鬼払いが行なわれている。ここは病人から病気の鬼が出ていくようにというような私的な鬼払いの場所である。途中の山道にも鬼払いしたばかりの跡があったが、ワ族の人々の心にはさまざまな精霊が生き続けている。

3 四人の頭人

原始共同体社会のワ族の村寨は、窩朗が政治、経済、宗教の一切を取り仕切っていたが、外部の影響によりワ族内部に経済的に富裕な〈チュミ（珠米）〉層が形成されるとそのなかの有能な者が頭人に選ばれ、村寨の政治、経済、軍事、他寨

との交渉等の実権を握り、窩朗は宗教的儀礼の管理者となった。現在の中国になる前のワ族の村寨は、窩朗、頭人、魔巴（巫師）が有力者であった。

しかしワ族の村寨では指導者の独断専横はなく、首狩り、対外紛糾、大きい宗教的行事など重大事は頭人会議で相談し、そこで決定が下せない場合は家長会議か寨民会議を召集して決定した。寨民会議には、発言権は与えないが女性やこどもも参加させている。

ワ族の頭人は村寨全体の存続、繁栄に責任を持つ指導層として存在し、生活も一般村民と大差なく、いわば義務職であった。

現中国成立後、人民政府は階級闘争理論を適用して頭人を否定することはワ族社会の発展段階から見て実態に適合しないと認め、頭人層＝民族上層部を尊重し、彼らの指導力を利用してワ族社会の改革を行なう方針をとった。

50年代なかば、頭人制は廃止され村長制になったが、滄源県の話では、58年頃までは頭人が村長になる場合が多かった。その後頭人の家柄の人は勐董鎮に出て県の仕事をするようになり、村に残っている頭人層は少なくなった。西盟県でも同じように頭人層は民族幹部として県の仕事につく人が多かったようである。村に残った頭人はその後も村民の尊敬を受けてきたが、もう鬼籍に入った人が多く、幸い健在な4人の頭人に会うことが出来た。

滄源県媯汀寨には元頭人ヤン ローターさんが健在であった。年齢76歳、囲炉裏を前にして静かに籐椅子にかけていた。家族は9人、息子は県の仕事をしていて家にはいない。畑仕事や家畜の世話には息子の妻と甥の二人がやり、あとは孫たちである。

頭人の呼称、区別は地域により異なるが、媯汀寨では4種類の頭人がいた。総括責任者のムン、内政事務担当のゲ、外事担当のジェ、他の村に代表として赴く役のランである。ヤン ローターさ

んは火頭という種まきなどを管理する頭人であったという。この分類のどこに相当するのだろうか。

媯汀寨では頭人は世襲制で、村寨はこの4種類の頭人によって運営され、特別な問題が起きれば集会を開いて決定した。いまは村長制度になり、選挙で選ぶ。この寨の村長は八ヵ月前に就任した人であった。

ワ族は頭人ばかりでなく老人を尊敬し、狩猟の獲物は頭の部分をまず老人に分ける。儀式は老人の唱える呪文によって始め、特別な行事はまず老人に報告し、同意を得てから実行に移すというように老人を尊重する。

現在頭人層は勐董鎮に移った人が多いが、ヤンローターさんの息子のように単身赴任の人もある。勐来の小学校の女教師は、父がこの村出身で勐董鎮で働いているが、彼女は父の村に帰って教師になった。故郷の村とのつながりは切れていない。

羊冷寨の頭人ダー ブロッカーさんはこの寨のナンバー3の頭人だった。祖父の代からの頭人で、おだやかな顔つき、長身、85歳とは思えない頭も足腰もしゃんとした人である。結婚前の名はアイカー、結婚後子ができる子と子の名のブローをつけてブロッカーとなり、いまは老人に対する尊称ダーをつけてダー ブロッカーと呼ばれている。ワ族の父子連名制は子の名が前になり、自分から祖先へ代々の名を呼び上げる。

西盟県でも二人の頭人にあった。一人は僕僕郷阿佻来寨の頭人ダッ プランさん。ダッも尊称であろう。年齢80歳、矍鑠としてよく話す磊落な人、元頭人ではなくいまも頭人であるという。4人の頭人のなかで一番能弁であった。妻は70歳、8人の子は全員成長し、2人は西盟鎮で県の仕事、6人はこの村で農業をしている。

5世代前、ワ族とタイ族一緒にミャンマーから移住してきたが、いまは全員ワ族の寨の頭人としてダッ プランさんもワ族であるが、タイ語も話

し、夫妻ともタイ族的風貌である。アワ山区という土地柄タイ族がワ族に同化したのだろうが、文化的にはタイ族文化が優位にあり影響が大きいことはダッ プラン夫妻の物腰や家の雰囲気などに表れている。ダッ プランさんは大切にしまっている経文や小さい金の仏像などを見せてくれる。雲南省政治協商会議委員の招請状もある。50年代ダッ プランさんは省の政協委員を務めた。新中国のワ族としての改革に積極的に働いた頭人であろう。

もう一人は勐梭郷戈約寨亜落村の頭人、名前は不詳、68歳、4人のなかで一番若い。30数年前本村の亜落寨から10人の仲間を引きつれて移住し、亜落村を作ったリーダーである。これまでどのような苦闘があったのか知る由もないが、囲炉裏の前に座り、ほとんど語らない寡黙の人であった。

それぞれ風格、個性のある4人の頭人、激しい政治の波に洗われたワ族の村寨の支柱として生きてきたであろう頭人に会えるとは、予想しないことであった。

4 特徴的な生活文化

(1) 水酒。

西盟ワ族の村寨では、いつも水酒のコップを差し出された。真っ黒な竹のコップ、ちょっと勇気がいるが一口飲んで指で拭き、返す。ところが相手は一口飲んで指で拭き、また差し出すのである。飲み終わるまでやりとりが続く。それは歓迎の表現であり、客は飲みほさなければ礼に欠けることになる。水酒で歓待するのはワ族にとって最高の礼なのである。祭祀にも水酒は欠かせず、水酒がなくては儀礼は成立しない。

水酒は赤米を発酵させた醸造酒に水を加えるのでアルコール度は低い。原料の赤米を手にとってみると、粟粒かと思う小粒の米であった。「小紅米」というがヒエの種類に近いようだ。

(2) 爛飯＝おじや。

ワ族の食事は主食、副食の区別がなく、囲炉裏

にかけた大鍋に米と野菜を入れて長時間煮る。よく煮るので爛飯といい、漢語では干飯と稀飯の間のご飯と説明するが、日本のおじやと同じものである。ご馳走の時は鶏肉を入れ、羽毛も皮もよく焙り砕いて入れる。味付けは塩とトウガラシである。它朗寨でご馳走になった爛飯には肉や筍が入っていた。

食事はこれだけで漬物もなく、食器は木製のお碗だけである。元來手づかみで食べたが最近はお箸を使う。

おじやはその家の主婦がその場にいる全員に等分に分け、それぞれが量を融通しあう。これは原始平均主義の名残りであると説明されるが、一人分ずつ盛りつける日本の食事にもこれに類した食習慣ではないだろうか。

(3) 牛肉食。

滄源崖画を見た日、昼食は勐来のワ族の家でとった。囲炉裏のそばで、大きい牛肉塊に塩と香料をすりこみ、太い串を削って刺し、囲炉裏の火で焼き、小さく切って出してくれる。ワ族が腰に下げている細身の長刀で切ったり、削ったり、この刀ですべてを行なう。大胆な調理法だがたれをつけて食べた牛肉は非常によい味であった。

崖画を残した古代人同様ワ族の祖先は野牛を捕えて食料とした。以来、牛はワ族にとって主要な食料であり、宗教的行事として多数の牛を屠殺し、村寨全員で分けあって食べた。頭人や富裕な家は多数の牛を提供し、「牛の尻尾を切り」という娯楽性を伴う宗教的行事として平等に分けあった。これは非生産的であるとか浪費であるとする批判があるが、ワ族にとって、牛は耕牛ではなく食料であったことを考えればその批判は適切ではない。

(4) 女性のスカート

アワ山区は北回帰線の南にあり気候は温暖であるから、ワ族は簡単な衣服と足ははだしで暮らしていたが、女性のスカートとその染料に興味ある特徴がある。

ワ族には伝説の時代から多年生木綿の木があり、1年生木綿もタイ族から伝来し、綿織物の伝統がある⁽¹⁰⁾。紡車はなく、紡錘を独楽のように廻して紡ぎ、地機（じばた）で厚手の布を織る。今回あちこちで地機織りする女性に出会い、道を歩きながら糸紡ぎする女性を見かけた。

女性の衣服で面白いのはスカートである。〈文献通考〉に「黒棘濮…婦人以幅布為裙…」とあり、唐代すでにこのスカートをはいていたことがわかる⁽¹¹⁾。「黒棘濮」はワ族の一支系、「幅布為裙」とは布の横幅を丈としてスカートとすることである。現在も同じように長方形の布を巻き、タイ族のように筒状に縫わない。布幅は40～50センチであるから丈は短く膝下まで、下肢には脚絆をつける。厚手の布を腰に巻きやすくするため、上部に薄い布をはぐ工夫がある。また、薄布の両端に厚手布をはぎ、ずらして二つに折って巻くと膝下からもう一枚の厚手布が足首まで、優雅で動きやすくする面白い工夫もある。



▲ 西盟県它朗寨
小学校の先生と生徒。幅広のスカートをはいている。

スカートの色は赤や茶色を基調とし、黒や黄色の細い縦縞模様が入る。糸は先染の糸を使う。伝統的技法では、赤はラックカイガラムシ（虫膠）を使い、酸性の植物液を加え、黄は黄色の花やピンロー樹の葉の煮出し汁、黒は藍で濃く染めた後チークの樹皮の煮出し汁に漬け、灰色は同じくチークの汁を染料とした⁽¹²⁾。

ラックカイガラムシは古くからインド、ペルシャで染料として使われた。雲南ではラックカイガラムシの分泌物からとる紫膠または虫膠の生産が現在も盛んであるが、これを糸の染料として使う話はワ族以外に聞かない。ワ族がこれを使っていたことはインド文化の影響を受けたモン＝クメール系民族の特徴といえるだろうか。

このほかハトムギの飾りベルトや野草の繊維で織った袋など、素朴だがなかなかよい物がある。

四 砍頭祭穀と木鼓

1 砍頭祭穀＝人の首を供えて豊作を祈る行事

西盟ワ族には50年代まで人間の首を供えて豊作を祈る風習があった。この風習はある程度発達した未開農耕民の間で行なわれた風習である。

宋恩常氏によれば「ワ族は穀物の豊作を願い、毎年播種前と収穫期に村落単位で首狩りを行い、最大の自然神〈木一吉〉と穀物の神〈西奥布〉に捧げた。…彼らは、神が最も喜ぶ犠牲は人間であると考え、首狩りをして穀物の神を祭り、牛の尻尾切り等の祭祀活動を派生させた。すなわち牛、豚を犠牲として切った首に捧げ、首を切られた人に対して許しを祈求した。彼らは、切られた人の頭と髪の毛は永久に生き続け、祭祀を行なわなければ報復されると思っていたのである。」⁽¹³⁾

滄源県で黄蕾さんは、「ワ族は唐以来ソバ、アワなどを栽培し、明代から陸稻栽培を始め、約百年前から水稻を栽培するようになった。稲作はタイ族から学んだ。水稻の粃を畑に播いて不作だった時、タイ族は豊作の祈りをしたか？とたずね、

最も大切な物を供えて祈るようにと教えた。ワ族は最も大切な物は人であると考え、首狩りして神に供え、豊作を祈るようになった」と語った。

西盟ワ族の首狩り伝説にもこれに類した伝説があり⁽¹⁴⁾、ワ族の首狩りの風習は約4、5百年前陸稻栽培開始と関連して発生したとする解釈が成り立つ。

黄蕾さんの話では、首狩りは簡単にはできない。襲撃の対象とする寨が強いか弱いか調査し、頭人たちが集まって計画を決めた。首尾よく首狩りに成功して帰ると村人は酒を持って出迎え、首を切った人を英雄と讃え、まずその人の家のそばに首を飾る。女性たちが集まって首の顔を洗ったり、髪をとかしたりしながら話しかける。「あなたは村のため、五穀豊穡のために首を切られた。家族や親戚は心配しているだろうが、飲み水も食物もあげますから心配しないで下さい」と生きている人に言うように話しかける。村寨全体がお祭り気分でご馳走を食べ、歌い踊る行事が何日も続く。それが終わる頃首は腐って骸骨になり、村はずれの木鼓房に納めるのだが、その前に〈砍牛尾巴〉＝牛の尻尾切りの行事を行なう。

牛の尻尾切りは黄牛を使う。牛の提供者が牛を引いて家の周囲を3回まわり、尻尾を切って屋根を越すように高く投げ上げると、男性たちが一斉に牛に群がって細身の長刀で牛の肉を切りあい、またたく間に肉はなくなる。村寨全員におごるためには2、3頭殺さなければならない。

尻尾切りの行事が終わると、男を先頭に踊りながら村はずれの木鼓房まで首を運び、杭の上につけた竹箆に納め、歯だけ見えるようにして大きい石をかぶせる。これを人頭桩といい、男性生殖器を象徴した彫刻を彫る。黄蕾さんはある寨で347本もの人頭桩を見たことがあるといい、豊作の祈りから村寨の威力誇示の首狩りともなった。

しかし、一般に首狩りのため互いに報復しあう仇寨関係は村寨にとって過大な負担であったから、

他の寨から人を買って首狩りしたり、死者の首に代えたり、年1回の首狩りを10年に1回に減らすなど、仇寨関係を回避する村寨もあった。57年5月の西盟県龍坎寨永不靈小寨の首狩りは、別の寨の素行の悪い奴隷の少女を買い、村に連れ帰る途中で首を切った。この寨は以前から人を買って首を切り、他寨を襲撃して首狩りしたのは数十年間に3回だけで仇寨関係は少なかったという⁽¹⁵⁾。

仇寨間の和解は少なかったが、双方が和解を必要としたり、一方が和解を求めた場合は双方に友好的な村寨の調停により和解したこともある。その際日本の手打ち式に類した「手洗いの儀式」を行なった。

儀式は双方の寨が武装し隊列を組んで式場に参列し、仲介者の主宰で始まる。双方の大頭人と大魔巴が互いに相手に酒をすすめ、それぞれの村寨の歴史を語り、相手に首を切られた人の名を呼び上げる。その後互いに誤りを認め、以前のことは水に流して友好的につきあうことを表明しあい、仲介人のかける水で双方の大頭人、大魔巴が一緒に手を洗い、約束を守る決意を示す石割りを行い、牛の肋骨など贈り物を交換し、犠牲にした牛の肉で一緒に饗宴して儀式を終えた⁽¹⁶⁾。

滄源ワ族は仏教が伝来した頃から首狩りの風習がしだいに消滅し、盤汀寨は首狩りを止めてすでに百年、仇寨関係がなくおだやかな村であった。羊冷寨の頭人ブロッカーさんも、「約百年前、大理から来た人が子孫が絶えることになるから止めた方がよいと忠告し、その弟子も続いて論したので止めるようになった」といった。大理の白族は大乗仏教を信仰し、その影響により滄源ワ族の首狩りの風習が止んだことになろうか。しかし外からの襲撃は続き、羊冷寨では40数年前にも2人の首が切られ、「いつ大カワが攻めてくるかとびくびくしていた」という。山の向こうの大カワとはどこかわからないが、当時首狩りを続けていた西盟ワ族も50年代後半首狩りを止めた。

2 木鼓

ワ族というと首狩りが話題になるが、ワ族の精神生活においては木鼓の方が重要な意義を持っていた。

人類が石洞から出たというスカンリ伝説は、母系制社会から父系制社会への移行を表現し、ワ族の父子連名の家譜はこの時から始まり、木鼓も父系氏族のシンボルとしてこの時に発生したという。したがってワ族の村寨には「かつてはどの寨にも木鼓があり、1個だけけでなく、2、3個、大馬散寨では6個の木鼓があった。木鼓は神に通じる物、戦闘を統一する信号であり、各姓氏はそれぞれ木鼓房を持ち、その近くに住んでいた。原始村落共同体が出現すると本鼓は氏族のシンボルから村寨のシンボルに変わった。〈拉木鼓〉＝木鼓引きは西盟ワ族の最大の祭りであり、祖先への思慕を表すものであった」⁽¹⁷⁾。

木鼓引きは正月行事で、水神の祭祀に続いて行なわれた。ワ暦の1月3日（太陽暦の12月10日頃）、水神の祭祀である〈黒拉翁〉（新しい水に接するの意味）の行事がある。人間はスカンリから出た時口がきけず、三日目に顔を洗ってから話せるようになったという伝説に由来して1月3日に行なう。この日は朝早く祭祀担当の窩朗が木鼓をたたいて大声で叫ぶと村人は一碗の米を持って窩朗の家に集まり、男性は竹藪から切り取った竹を持ち、魔巴について水源に行く。水源で魔巴は焼いた鼠を水べりに置き、「人類はスカンを出て以来達娜（水神）のおかげで水があった。古い年が過ぎ、新しい年の始め、天上には開天の神、水中には達娜神、我々は鼠を持ち、竹を運んできた。あなたは鼠を取り、我々に水を与え給え…」と唱える。その後笕の竹を取り替え、新しい笕から流れる水を長老が汲み、水管理の小頭人の家に運び、おじやを作って皆に食べさせる。それから全員で寨内を清掃する。翌朝一番鶏が鳴くと娘たちは先を争って起き、新しい水を汲みに行く。一番早く起き、

動作の機敏な娘が若者の人気者となる。このような日本の若水汲みに似た行事があった。

翌日のワ暦1月5日が木鼓の祭り〈窮克落〉である。早朝数十人の壮年男性が銃、斧、刀を持って選定しておいた大木の下に集まり、大魔巴が数句唱えてから銃を大木の葉に向かって一斉に放ち、かわるがわる木を切る。切り倒した木の幹を2メートル前後に切り、村に引いて帰る。魔巴は樹身にまたがって号令をかけ、みんなは歌いながら引く。全寨の老幼男女は盛装して出迎え、寨内に引き入れると犠牲の牛を殺し、法衣をはおった魔巴が木の前後を踊りながらスカンリ伝説、村寨の歴史、氏族の歴史を朗唱する。夜通し酒を飲んだり、踊ったり、数日にわたって祭りが続く⁽¹⁸⁾。

滄源ワ族の媪汀寨には、木鼓はないがニエムの小屋があり、水場の笕は正月に取り替えるといい、いまでもこのような儀式が残っている雰囲気があった。西盟ワ族の村寨ではどうであろうか。它朗寨で聞いた話では、いまワ族の村の一番の楽しみは結婚式とか新築祝いで、結婚式は12月から2月の農閑期に行い、数日仕事を休み、全寨あげて踊りや歌で楽しむ。

ワ族の村寨に必ずあった木鼓と木鼓房はいまはない。今回訪ねたどの村寨にもなく、滄源県博物館の階段下で埃にまみれた巨大な木鼓に出会った。木鼓房は雲南民族学院博物館で見ただけである。

「民族委員会の人みんな持って行ってしまった」という女性の声が思い出されるが、〈西盟佤族自治县概況〉は「解放後党の民族政策の光輝照耀の下、木鼓は村寨のシンボルから特色ある民族楽器へと変化した」と記している。ワ族の木鼓への思いは断ち切ることができたのであろうか。

五 タイ族、ラフ族との関係

滄源県で黄蕾さんは「他民族に対してワ族はタイ族の首は取ったが、ラフ族の首は取らなかった。ラフ族の首を切って袋にいれ、持ちかえる途中首

の口が動いてお尻に噛みついた。以来ラフ族には鬼が多いという理由で切らなくなった」と話し、西盟ワ族の間でもラフ族は仲間だから首は切らなかったという話がある。

ワ族と最も関係の深い民族はタイ族である。雲南からシャン高原、タイ北部まで、ワ族は常にタイ系民族と密接な関係を持って居住していた。

〈雲南民族情況滙集〉には、「ワ族は元来盆地に住んでいた。たとえば孟連盆地はもとワ族の居住地であったがタイ族が移住してきた。ワ族の一部はタイ族と親密になりタイ族文化を吸収したが、大部分は山地に移動し原始状態を保っている。ワ族は瀾滄地区の最も早い先住民族であるといえる。」⁽¹⁹⁾とある。

明代初期、瑞麗にあったタイ族の孟卯国が明軍に敗れ、王子はタイ族を率いて怒江を下り、カワ山に入って馬散王と盟約を結び、馬散王の娘を妻とした。馬散王は彼らはを孟連に住ませた。タイ族は開墾に励み、文化水準が高いため十余年後には周辺民族を統治するようになり、明朝から世襲の孟連長官司に封じられ、後に西盟ワ族は孟連のタイ族土司の間接統治下に入る⁽²⁰⁾。

ワ族の伝説に「ワ族が孟連にいた頃、ワ族は馬を持ち田を耕し、タイ族は鹿を持ち山地を耕していたが、ワ族は馬と水田をタイ族の鹿と交換した。ところが鹿には逃げられ、馬も水田もなくなった。それ以来ワ族は山地を耕し、タイ族は田を耕すようになった。後にワ族とタイ族の間に争いが起こり、ワ族はしだいに西盟に移動した」⁽²¹⁾とあるのは、ワ族がタイ族の勢力に圧倒され、アワ山区へと移動していった経過を語っている。

ところがアワ山区にはすでにタイ族が小さい盆地に水田を開いて居住していた。西盟ワ族の村寨は最も古いものでも4,500年の歴史であるが、岳宋寨や中課寨には移住当時すでにタイ族が居住していたという話がある。

約200年前馬散からワ族が中課寨に移住してき

た時、タイ族は小盆地に水田を耕して住んでいた。ワ族は森林を刀や原始的道具で切り開き、中課寨を作って焼き畑耕作を行なった。当初両民族は共存しているが、やがてワ族はタイ族を襲っての首狩りするようになり、タイ族は移動していく。1930年代に入り、タイ族はワ族の首狩りに遭い、抵抗できなかったため孟連に、一部は勐梭に移住したという。このような例は幾つかあり、西盟では孟連とは逆に先住のタイ族がワ族の首狩りを避けて移住していったが、タイ族の集落とよい関係にあったワ族はタイ語を話し、仏寺で修行した頭人もある。ワ族はタイ族から鉄器使用、農耕技術、家屋建築、刺青、包齒などを学び、タイ族が残っていた水田で水稻耕作を始めた。しかしワ族は水田より山地を重視し、水田は収穫は多いことは知っているが労働が過重であると嫌い、水田は荒蕪地となる傾向があったというのは面白い。ワ族が水田を自己開発したことはほとんどなかった⁽²²⁾。

タイ族に次いで関係の深い民族はラフ族である。西盟ワ族とラフ族の関係はタイ族より短く、約200年前からである。清末、反乱を起こしたラフ族がアワ山に逃げこみ、ワ族はこれに抵抗して大敗した。ラフ族はアワ山に勢力を維持し、頭人を通じて間接的にワ族を統治し、ワ族はラフ族から犁をはじめ進んだ技術を学び、ラフ語を話せる者も多い。

タイ族よりは少なかったが、ラフ族もまたワ族の首狩りにあったので、「山道でラフ族がワ族に会うと身を隠して避けた」という。しかし、タイ族と違いラフ族は報復する。たとえば40年代、狩猟に行ったラフ族がワ族に襲われ、3人が首をとられた時、ラフ族はその寨のワ族が町に行く途中を待ち伏せして7人殺したという。

黄蕾さんの話の「ラフ族には鬼がついている」というのは、ラフ族とは戦って敗れたり、報復されたりしたことから手強い相手という意味でこう

いうようになったのであろう。タイ族は力で対抗することは不得手なのか、知恵でワ族やハニ族より優位に立ったという伝説が多い。

ワ族は早くから陸稻と小赤米を栽培していたが、ソバは3、4代前にラフ族から、アズキは4、5代前リス族から、アワは40年代にハニ族から、黄豆はラフ族から、綿花はタイ族から、タバコと藍はラフ族から伝わったという⁽²³⁾。首狩りの風習のため恐れられたワ族だが、周辺民族との間にはこのような関係があった。

現在タイ族が大勢住む西盟県勐梭郷には、ワ族が鶏一羽を持ってきてタイ族の農家で米と交換したり、最近では牛一頭と一戸分の屋根瓦とを交換することもある。ラフ族との間にも必要に応じて物々交換を行なう関係が続いている。

ワ族とタイ族が一緒に移住してきて作った西盟県阿佤来寨も、民族関係を考える上でたいへん興味深い村寨であった。

六 アワ山の半世紀

アワ山区が中央政権とかかわるようになったのは1872年、反乱を起こしたラフ族の李通明が敗れて逃げ込んでからである。李通明はワ族の抵抗を破り、アワ山区に勢力を維持した。清朝政府は李通明を西盟、勐梭の土目に封じ、李通明は頭人を通じてワ族を間接支配した。

国民党時代は瀾滄県に所属したが、交通は人馬の通る羊腸たる山道だけで、車の通れる道路が開通したのは1956年である。

49年の始め、瀾滄の反蔣統一戦線革命部隊が県政府を総攻撃、国民党軍は敗れて西盟ワ山に逃げこみ、馬散寨等のワ族の待ち伏せ攻撃にあって壊滅し、一部がミャンマーに逃れた。以来約4年間国民党残存勢力との攻防が続く。ワ族の村寨は両者の間でどちらかに組みせざるを得なかったと思うが、革命部隊から鶏の羽など物による通信で指示を受けたワ族の村寨、たとえば中課寨などは、

国民党軍を丁重に迎えて酒食で歓待し、夜更けに寝込みを襲って壊滅させた。

50年12月、雲南第一次少数民族北京参観団で国慶節祝典に参加した頭人はじめ数千人が参加して西盟区政府の成立が宣言されたが、半年後の51年5月、ミャンマーから国民党残存部隊が反攻し西盟区政府は崩壊、国民党系の西盟郷政府が成立し、ワ族の頭人を含む区政府側の指導的人物が逮捕、殺害された⁽²⁴⁾。52年12月、人民解放軍の進軍により国民党残存部隊は殲滅され、以後大規模な反攻は無くなった。

民族工作が再開され、武装民族工作隊と解放軍がワ族の村寨を巡回する。最初は道路封鎖や襲撃にあい、人々は逃げ隠れしたが、頭人の警戒心を解くことに努め、村に入って住民と接触できるようになった。

続いて、昆明、北京参観の頭人参観団を組織し、民族幹部養成のための民族訓練班を開設し、民衆の生活救済のため大量の塩と食糧を放出し、種粃の貸し付け、犁や鋤の無料支給、水利施設や水田造成の援助等を行ない、仇寨関係や民族間の対立を和解させた。

55年9月、各村寨の生産代表大会開催、56年には馬散等7寨に生産文化宣伝ステーションを設立、これを過渡的な末端政治組織とし、自治県成立準備代表を選出させ、同年6月西盟ワ族自治県準備委員会が成立した。この後始まった政治的混乱の影響のためか正式に自治県が成立したのは10年後の65年である。

政治組織の整備と並行して社会改革が進められた。ワ族社会に対する政策は新中国の一般の社会改革とは異なり、頭人等それまでの指導層を尊重し、彼らの同意を得てしだいに大衆に合作社を作らせ、その過程で搾取と原始的要素を除去していくという方針であった。したがって土地改革は行なわなかったが⁽²⁵⁾、56年、6寨で試験的に農業生産合作社を始め、焼畑耕作の廃止を指導し、鋤

の使用と牛耕を教え、多数の鋤の頭と種粃を支給した。その結果合作社は作物が増収となり、加入農家が増加した。しかし65年になっても加入戸数は県農家総戸数の25%である。

「西盟佤族自治县概況」は「生産の発展、貧困の解決には合作化の道をとることは正しいがその速度は早すぎてはならない。しかるに58年以降左傾思想の影響下曲折の道をたどり、特に10年内乱では厳しい災難を蒙った」と述べ、具体的事実を記している。

57年、合作化運動中“内地に追いつき、追い越せ”のスローガンで生産発展資金が数個の試験的合作社に集中して使用され、個人営農農民に対する補助が減少した。合作社はワ族の神聖視する〈龍山〉で木を切り、水路を掘ったため住民の怒りが爆発、窩努寨では全寨挙げて合作社社員の家を襲撃し、幹部を殺す事件が起きた。

58年、反右派闘争により幹部が“右派分子”のレッテルを貼られ、“搾取の清算”“階級闘争”の運動が展開されたため頭人は恐慌をきたし、大衆も参加して暴動が起きた。

60年から63年の調整政策により一時状況は好転したが、まもなく文化大革命が始まった。西盟県では合作化の過程でも実状に合わせて人民公社にはしなかったが、文革中の69年4月、全県一斉に僅か7日間で人民公社化を敢行、“一大二公”の実現と称して村寨の合併移転を強制、民族の異なる村寨も合併させた。真夜中にたいまつをともし、ドラや太鼓を鳴らしながら保有米を“忠誠の穀物”として公社に一斉に送り届け、種粃まで出した村寨もあった。

公社化により耕牛は有償で買い上げたが、きわめて低価格だったばかりか支払う現金がなく、1、2年で支払う約束も果たされず、75年まで支払い延期となった。

“大寨に学び、追いつき、追い越せ”運動により、電気も技術も無い山奥の村寨に多数の製茶機、

精米機、ディーゼルエンジン、トラクター等の機械が送りつけられ、使えないこれらの機械は放置され、鉄屑の山となった。

“陸稻を銃殺し、小赤米を消滅し、ソバを切り倒せ”というスローガンが掲げられ、トウモロコシだけを栽培させられたため、一人平均食糧分配は65年の736斤から103斤に激減し、野草を食べて飢えをしのぎ、多数の病人が出た。

文革が終わり、77年10月、県委員会は農村工作風の整頓を決定、県と公社の幹部が生産隊をまわって中央の方針、政策を説明し、79年からは“小自由”を徐々に始め、自留地の拡大、大家畜の個人飼育を許し、穀物の超過供出義務を免除し、食糧不足には米を補給し、疲弊しきった村寨を休養させた。

次に文革中強制的に合併させた村寨を3年がかりで調整し、234に合併した生産隊を360に分散させ、平均每隊32戸、144人とした。

生産責任制は80年から徐々に導入、78年末の三中全会の方針を貫徹させて以来おだやかな村の暮らしが戻ってきたという。

半世紀の西盟ワ山の変転を辿り、今回訪ねた各村寨の印象と重ねあわせ、激動の40余年が大馬散寨はじめワ族の村々にとってどのような歳月であったかを想像すると、きわめて感慨深い。この半世紀は、ワ族にとってアワ山区のアジュールとしての意義が失われ、中国社会に組み込まれていく過程であった。それは犠牲と苦悩を伴う歳月であったと思うが、いまワ族の村寨は小康状態にあるといってよいだろう。今後社会主義市場経済なるものの波がどのようにおよび、伝統的村寨をどう変えていくのか、そして彼らはその先にワ族としての村寨をどう再構築するだろうか？と思う。

〔注〕

- (1) 宋恩常主編 大林太良監修 日本語版『雲南の少数民族』177頁 日本放送出版協会 91年

- (2) 中国少数民族簡史叢書『佤族簡史』6～8頁
雲南教育出版社 85年
- (3) 民族の世界史6『東南アジアの民族と歴史』
13頁 山川出版社 84年
- (4) ミャンマーのワ族, タイのラワ族については,
申旭・劉稚『中国西南与東南亞的跨境民族』第
12章に比較的詳細な紹介がある。雲南民族出版
社 88年
鳥越憲三郎『倭族から日本人へ』第一章ラワ
族の農耕儀礼に紹介されるラワ族の風習は今回
訪ねた中国のワ族の風習とほとんど変わらない。
弘文堂 昭和60年
- (5) 《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会編
『佤族社会歴史調査』(一) 106頁 雲南人民出版
社 83年
- (6) 前掲『佤族簡史』8頁
- (7) 鳥越憲三郎編 『雲南からの道』88頁 講談
社 昭和58年
若林弘子『タイ北部ラワ族の高床式住居』に
あるタイのラワ族の住居構造図は、滄源ワ族の
住居と同じである。
西盟ワ族の住居には低い壁がある。
- (8) 前掲『佤族社会歴史調査』(一) 7頁
- (9) ワ族の当面する近代化対応の問題について岳
宋区を中心に調査分析した論文に瞿明安「西盟
佤族自治县岳宋区佤族村社向社会主义直接過渡
的研究」がある。『雲南多民族特色的社会主义
現代化問題研究』所収 雲南人民出版社 86年
- (10) 李根蟠・盧助『中国南方少数民族原始農業形
態』262頁 農業出版社 87年
- (11) 前掲『佤族簡史』23頁
- (12) 前掲『佤族社会歴史調査』(一) 100頁
- (13) 宋恩常『雲南少数民族研究文集』645頁 雲
南人民出版社 86年
- (14) 前掲『佤族社会歴史調査』(二) 108頁
- (15) 同 上 (二) 128頁
- (16) 前掲『佤族簡史』68頁
- (17) 前掲『佤族社会歴史調査』(一) 153頁
前掲『東南アジアの民族と歴史』149頁
- (18) 『西盟佤族自治县概況』26頁 雲南民族出版
社 86年
- (19) 『雲南民族情况匯集』(下) 130頁 雲南民族出
版社 86年
当時西盟は瀾滄県に含まれていた。
- (20) 同 上 124頁
- (21) 前掲『佤族社会歴史調査』(一) 8頁
- (22) 同 上 (二) 48頁
- (23) 同 上 (一) 60頁
- (24) 李喬「班簪, 中課訪問日記」(前掲『雲南民
族情况匯集』下所収)によれば, 中央人民政府
政務院派遣の中央西南訪問団の一部は51年4月
西盟の班簪寨, 中課寨を訪問した。国民党部隊
の反攻はその翌月である。
なお, 雲南民族情况匯集(下)には頭人情況調査
等, 当時の情况を知る資料が収録されている。
- (25) 王連芳『雲南民族工作实践与理論探索』卷末
付録の「对佤族地区民族工作的八項公告」第三
項。雲南民族出版社 89年

